

令和 3 年 5 月 1 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12994

研究課題名（和文）児童福祉施設における性問題介入のためのスタッフトレーニングプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a staff training program for sexual problems intervention in child welfare facilities

研究代表者

高岸 幸弘（Takagishi, Yukihiro）

熊本大学・大学院人文社会科学部（文）・准教授

研究者番号：00635170

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：児童福祉施設における、子どもの性的問題行動に対する介入はスタッフに専門的なスキルが必要とされる。しかしながら、研修やトレーニングなど性的問題行動に特化したスタッフの資質向上の機会は限られている。そこで、本研究プロジェクトでは子どもの性的問題行動に介入した経験のあるスタッフの実態とニーズに関する調査を行い、それらに基づいた子どもの性的問題行動の介入に特化したスタッフトレーニングプログラムを開発した。プログラムの実施前後の効果検証によって、種々のスキルの向上が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

治療・教育を含む、児童福祉施設における子どもの性的問題行動への介入は、児童福祉の領域に限らず近年盛んに議論されている。そうした議論や支援の実践の中から生まれた介入プログラムは貴重なものであるが、それらを十分に効果的に活用するスキルに注目し、促進させるプログラムはこれまでなかった。本研究プロジェクトで開発したプログラムを既存の介入法と組み合わせることにより、より望ましい子どもへの支援がなされていくことが期待できる。

研究成果の概要（英文）：Interventions for children's sexual problem behavior in child welfare facilities require specialized skills for staff. However, there are limited opportunities to improve the qualifications of staff who specialize in sexual problem behaviors, such as workshop and training. In this research project, factual and needs survey were firstly conducted. Secondly, staff training program specialized in sexual problem behaviors was developed based on the results of the survey. The effectiveness of the program pre and post its implementation showed that various skills were improved.

研究分野：臨床心理学

キーワード：児童福祉施設 性問題行動 スタッフトレーニング

1. 研究開始当初の背景

児童福祉施設における子ども間の性加害や性被害といった性問題は、集団生活という構造ゆえに、それが生じうるリスクを常に抱えており、事実、児童福祉施設における性問題事案、特に性加害の問題は増加傾向にある。そういった実態を背景に、これまで子どもの性加害に対するさまざまな治療教育的介入法が開発され、わが国でも徐々に普及してきている。その治療教育プログラムは、諸外国の効果検証研究での再犯率の低さをみても、ある程度その内容の妥当性や信頼性は確立されつつある。ただ、事例ごとにみると治療教育の失敗事例は少なからず認められる。子どもの性加害の治療教育介入が成功裏に進む要因とそうでない場合の要因については、加害少年の特性から施設の構造上の問題まで幅広く指摘されている (Brauers et al., 2015)。そのうち、介入がうまくいかないケースの共通点のひとつは、介入初期段階の失敗であることが指摘されている。

そのため、性問題が生じた際の初期介入のあり方についても議論が重ねられてきたが、マニュアルやプログラムは整備されていても個々の事件の独自性は大きく、治療教育的介入が行き詰ったり、やるべきことが分かっているにもかかわらず効果的に遂行できなかつたりなどの問題は一定程度生じている。これが意味することは、初期段階で行うべきことの明確化や、中長期的介入プログラムの洗練化と同時に、それらを遂行するスタッフの基礎的知識や技能の向上が今後の課題だということである。これは日本に限ったことではなく、少年の性問題の治療教育に関する先進国である米国でも、対応するスタッフの知識、態度、そしてソーシャルスキルによって介入の成否が分かれることが報告されている (Fernandez, 2010)。つまり、性問題への適切な初期段階の介入や、治療教育プログラムは、それを使用するスタッフの基礎的スキルの土台の上に活用されるべきものなのである。

子どもの性問題に対応する専門スタッフのトレーニングを先駆的に行っている国の一つは米国である。当国では、性問題はもとより、少年非行全般において、それに関わるスタッフのためのトレーニング専門機関も整備されている。それでも性問題の治療教育的介入の脱落事例数が安定して報告されていることを鑑みると、スタッフの介入およびトレーニングについては克服すべき課題も認識していることは明らかであり、米国の実態を把握し、課題と成果を確認することはスタッフトレーニングの整備段階にあるわが国としては示唆的であるといえる。また、米国では司法機関を経てその監督のもと矯正機関で治療教育が行われる。日本では児童福祉領域がその一端を担っており、治療教育の土台に差異がある。したがって、性加害問題に対する捉え方が異なる米国でのスタッフトレーニングを究明することにより、わが国のスタッフトレーニングを相対化できるといえる。

性問題に関する治療教育的介入は徐々にその注目度が高まり、児童福祉や臨床心理学など種々の領域で議論されつつあるが、その治療教育の担い手であるスタッフに注目した研究はほとんどなく、そのあり方や効果検証は日本において開発と実施が望まれているところである。

2. 研究の目的

本研究では児童福祉施設における性問題に介入するスタッフのための、性問題介入に必要な基礎的スキルの向上に特化したスタッフトレーニングプログラムの開発を行うことを目的としている。性問題に対する治療教育の研究は、主にその介入方法や内容について議論されてきた。これに対して本研究では、先行研究が取り上げてこなかった介入スタッフの資質向上に着目している。児童福祉施設におけるスタッフの資質向上のためのトレーニングは、施設内外での研修会でなされることはあるものの、性問題への介入、しかも介入プログラムではなく、介入のための基礎的スキルに特化したそれはまだない。

このような特色を有する本研究が生み出しうることは次の2点である。一つ目は児童福祉施設職員の性問題介入にかかわる援助スキルの向上である。これは児童福祉施設職員の大きなストレスとなる性問題の対応の負担が軽減されていくことにつながり、児童福祉施設スタッフの職業性ストレスの軽減にもつながることが期待される。当然、より効果的な治療教育的介入も期待できる。二つ目は、スタッフトレーニングプログラムの開発によって、児童福祉施設における性問題の介入のみならず、将来的には修正の上、学校や地域で生じる性問題に介入する専門職、例えばスクールカウンセラーや教師、ソーシャルワーカーに対しても、この問題に関する対応資質の向上のためのトレーニングの提供が可能となることである。

3. 研究の方法

本研究の目的を踏まえて、以下の三つの作業課題に対し、それぞれの研究方法を用いて取り組む。

1) 先駆的取り組みを行っている北米の専門施設でのトレーニングシステムのあり方の視察調査を行う。米国を中心に、北米には性問題を抱える子どもの治療教育専門施設が複数設置されている。そのうち、スタッフトレーニングについて先駆的な取り組みをしている機関現地視察を行う。また、実際のトレーニングを体験し、日本でのスタッフトレーニングに導入可能なこととを検討する。

2) 児童養護施設、児童自立支援施設、児童心理治療施設での性問題対応の課題点に関するアンケート調査を実施する。そのうち児童自立支援施設と児童心理治療施設は全施設の悉皆調査とし、児童養護施設については無作為抽出により 200 ヶ所を対象としてアンケート調査を行う。アンケートでは、性問題に関するスタッフトレーニングを実施しているか、実施している場合の具体的な方法や内容、性問題に特化したスタッフトレーニングに望む内容や方法、などを調査する。また、施設内で生じる性の問題のスタッフの負担を調査し、具体的な負担の内容から、作成すべきスタッフトレーニングの内容を検討する。

3) 性問題対応スキル向上のスタッフトレーニングプログラムを作成し、トレーニングの実施、そしてその効果検証を行う。そのために、上記1)および2)の結果を踏まえたスタッフトレーニングプログラムを設計する。複数の施設でスタッフトレーニングプログラムを実施し、その前後で効果検証のための調査を行う。最初に作成したものを実施・運用しながら適宜フィードバックを得て、プログラム内容を修正していく。

4. 研究成果

上記3. 方法の内容に沿って、研究成果について報告する。

1) 北米の専門施設での研修システムのヒアリング調査

研究プロジェクト初年度に、性加害治療の学会 The Association for the Treatment of Sexual Abusers: ATSA で情報収集を行った。現在進行している研究トピックとして、性問題に特化したスタッフトレーニングプログラムに関するものは見受けられなかったものの(治療教育介入の前提として触れられることはしばしばみられた)、児童福祉機関職員のスタッフトレーニングに関する情報交換を行うことができた。そこでカナダのサイモンフレーザー大学(Simon Fraser University: SFU)が開発し、カナダブリティッシュコロンビア州の児童福祉機関に広く提供されているスタッフトレーニングに注目した。SFU および児童福祉機関にスタッフトレーニングを提供する基幹的機関である Milieu Children and Family Services を訪問し、スタッフトレーニングの実際について情報収集を行った。そこで重視されていることは、性問題やその他介入に専門的なスキルを必要とすることがらを適切に行うためには、支援スタッフとしての基礎的なスキルを適切に身につけているかが重要だということであった。そこで基礎的スキルトレーニング(CORE© Complex Community Care Residential Resources)について情報提供を受け、実際の3days トレーニングに参加した。

SFU および Milieu Children and Family Services の視察調査およびトレーニング参加によって、性問題に特化したトレーニングプログラムに、支援スタッフとしての基礎的スキルトレーニングの要素を含む必要性があることが明らかとなり、それらを最初のトレーニングプログラムに組み込むこととなった。

2) 児童養護施設、児童自立支援施設、児童心理治療施設での性問題対応の課題点に関するアンケート調査

児童福祉施設での子どもの性問題への対応とそのためのスタッフトレーニングの現状把握のためのアンケート調査を実施した。また、この調査では、スタッフトレーニング内容の作成のための、性問題に対応する際のスタッフの負担感についても情報を収集した。一つの施設につき、性問題に対応した経験のあるスタッフは複数人でも回答できるように設定したところ、合計590名(児童養護施設293名、児童自立支援施設156名、児童心理治療施設141名)の回答が得られた。

その結果、児童養護施設、児童自立支援施設、児童心理治療施設の施設種別に関わらず、大半の施設で過去1年間に性加害の問題が発生しており、どの施設でも性加害の問題を抱える子どもが入所していることが確認された。また、子どもの性問題に対応することは、通常の業務や、その他の非日常的なトラブルに比してストレス度が高いことが明らかになった。施設種別での差はなかった。また、具体的な負担感については、因子分析の結果、「サポート不足によるストレス」、「被害児に対する感情」、「自身の心身の不調」、「加害児に対する感情」、「仕事のあり方の問題」という要因が明らかとなった。また、負担ではなく、性問題に対応する際に必要と思われるサポート・支援については、因子分析の結果、「予防的施策」、「現場から離れて行う行動」、「チームでのケースの分析」という要因が明らかとなった。スタッフトレーニングプログラムの作成においては、これらの要素を組み込み、介入時の負担が軽くなることおよび、チームワークが機能することを達成できるようにした。

スタッフトレーニングに必要な内容として共通していたものは、子どもの性問題に関する基礎的な知識の獲得が求められているということであった。また、基礎的な知識が不足していることにより、具体的な介入支援が不明確になるほか、対応そのものへの不安が高まることも浮き彫りとなった。これらの結果を踏まえ、スタッフトレーニングプログラムには、子どもの性問題に関する基本的な情報のレクチャーを組み込むこととした。

3) 性問題対応スキル向上のスタッフトレーニングプログラムの作成・実施・効果検証

北米での視察調査、および国内での実態調査の結果を踏まえ、性問題に特化した全6回のスタッフトレーニングプログラムの試案を作成した。具体的には次のような項目からできている。

回	課題	経験することがら	効果・身につけるスキル
1	記録・申し送り	<ul style="list-style-type: none"> ・望ましい記録表現を知る ・端的な報告で良い反応を得る 	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な記録の仕方 ・明確で分かりやすい申し送りの仕方
2	見立て・アセスメントのあり方	<ul style="list-style-type: none"> ・アセスメントの意義を知る ・多面的に情報を分析することを経験する 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報と行動を分析する力
3	スタッフ同士のケースを通じたコミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・対応法ではなく影響因への注目の重要性を知る ・短時間でケースを説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの背景を考えるクセと力 ・子どもを理解するための情報伝達力
4	性的問題行動の見立て	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの性問題に関する基礎情報を知る ・架空ケースの問題性の検討を行う（個人ワーク、小グループ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの性的問題行動の基礎知識 ・問題行動の背景の分析力・見立ての力 ・問題行動の深刻度の判断
5	深刻度の判断	<ul style="list-style-type: none"> ・初期対応の基礎情報を知る ・動機付け面接の基礎を知る ・架空ケースの応答場面の検討を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・初期対応の流れの基礎知識 ・聞き取り（引き出し）の技術
6	性的問題行動の初期介入	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の性に対する価値観を知る ・他者の性に対する考え方を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・性のことがらに動揺しない落ち着き

最初に児童心理治療施設で実施した。トレーニングの実施前後での効果測定および、トレーニング内容のフィードバックを受け、修正を行った。

また、性の問題を抱える子どもの情報交換を行う中で、思春期病棟を有している精神科病院も、子どもの性の問題行動に関する支援の場となっていること、そこでも児童福祉施設と同様に、子どもの性の問題をどのように理解し、介入支援すべきか問題となっていることが明らかとなった。そこで、2つの精神科病院において修正を行った性問題に特化したスタッフトレーニングプログラムを実施した。

トレーニング前後の効果測定を実施した結果、子どもの性的問題行動に対する介入の不安は有意に低下したことが明らかとなった。また、職場内ソーシャルサポートが有意に向上した。予想に反して、性的問題行動に関する基礎知識は増大する傾向にはあったものの、有意な増加とはならなかった。さらに、スタッフトレーニングプログラムの満足度についてはほとんどの参加者が満足していた。

スタッフトレーニングプログラム実施前後の効果検証によって、短期的なトレーニングの効果が認められたといえるが、それ等の効果が実際の介入支援場面で活かされていくか検証していくことが今後の課題と言える。また、現場スタッフに共通して求められている「子どもの性的問題行動の基礎知識」の獲得・定着は短期的には達成されづらいものかもしれないことが示唆されたが、トレーニングのあり方によって改善される可能性もあるため、この点も今後の課題といえよう。

総じて、本研究プログラムによって児童福祉施設および思春期病棟を有する精神科病院での、スタッフトレーニングプログラムの効果が確認されたが、今後はこのトレーニングの更なる洗練化と普及が今後の取り組みとなってくるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yukihiro Takagishi	4. 巻 62
2. 論文標題 Factor Structure, Validity, and Reliability of the Japanese Version of the Balanced Index of Psychological Mindedness (BIPM)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 54-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高岸幸弘	4. 巻 67
2. 論文標題 大学生におけるSexingの実態調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 熊本大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 127-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高岸幸弘	4. 巻 69
2. 論文標題 子どもの性的加害行為に対する児童福祉施設と医療機関の連携のあり方の一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 熊本大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 103-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高岸幸弘 松本祐一郎
2. 発表標題 児童福祉施設における児童間性虐待の対応に関するスタッフトレーニングのあり方
3. 学会等名 日本子供虐待防止学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高岸幸弘 西村岳人
2. 発表標題 性加害問題を抱える入院患児の対応に関する精神科病院スタッフのニーズ調査とスタッフトレーニングの効果
3. 学会等名 日本子供虐待防止学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 桐生正幸・板山昂・入山茂編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 242
3. 書名 司法・犯罪心理学入門 捜査場面を踏まえた理論と実務	

1. 著者名 ギル, E. & ショウ, J. A. / 高岸幸弘 (監訳), 井出智博, 上村宏樹 (訳)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 324
3. 書名 子どもの性的問題行動に対する治療介入 - 保護者と取り組むバウンダリープロジェクトの実際	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関